

2005 自主ゼミ(外山みどり先生)

Ordinary Personology.
Daniel T. Gilbert (1998)

In D. T. Gilbert, S. T., Fiske, & G. Lindzey, (Eds.) The handbook of social psychology (4th edition), Ch. 20.
New York: McGraw Hill.

Rep. 小森めぐみ.(一橋大学)

Table of Contents

I. Brunswick の子どもたち: Ordinary Personology のルーツ
I-i. 客観的アプローチ I-ii. 論理的アプローチ

II. Heider の子どもたち: Ordinary Personology のロジック
II-i. 素朴心理学 II-ii. 対応推論理論 II-iii. 原因帰属理論

III. Asch の子どもたち: Ordinary Personology のプロセス
III-i. 社会的認知の伝統 III-ii. オペレーションの流れ
III-iii. オペレーションの特徴 III-iv. 文脈の問題 III-v. 次なる伝統

IV. Ichheiser の子どもたち: Ordinary Personology のエラー

V. Ordinary Personology の基本的エラー

VI. 私たちの子どもたち: Ordinary Personology の未来

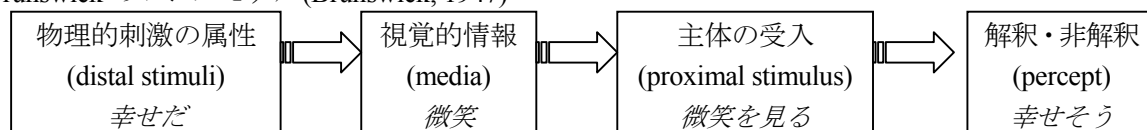
Ordinary Personology¹とは？

他者のある状況における状態（情動、意志、欲望）や、状況によって変わらない傾向性（信念、特性、能力）を一般の人々が知るようになる過程（以後OP）

I. Brunswick の子どもたち : Ordinary Personology のルーツ

I-i. 客観的アプローチ

Brunswick のレンズモデル(Brunswick, 1947)



☆知覚されたものと本物とを測っている測度を比較すれば、判断の正確さが分かる

⇒1940年代は、レンズモデルを概念的枠組みとした、相手の理解の正しさを検討した研究が興隆

問題点の指摘(Bruner& Taguri,1954; Cronbach, 1955, 1958)

I-i-a 結論の出ない結果 個々の研究結果が一貫せず、新しく持続的な事実が発見されない

I-i-b. あいまいな対象 パーソナリティの定義や測定方法が不明確で、それ自体も変化しやすい

Mischel(1968) 広範囲で文脈に依存しないパーソナリティは存在しないので、測定は不可能

I-i-c. 理論の欠如 研究のガイダンスとなる理論が生まれないうまま、研究の数だけが増える

¹ Personology とは、観相学＝顔だち・表情から、その人の性格・気質、また才能を判定する学問のこと

I-i-d. 不当な計算方法 <ターゲットの自己評定－他者による評定>で正確さを測定することは不適切²

>>これらの問題点の指摘と新しいアプローチの登場により、正確性研究は下火に

I-i-i. 論理的アプローチ

判断の正確性(how well)から判断プロセス(how)の検討へ(sensed by Bruner & Tagiuri, 1954)³

I-ii-a. 新しい方法

Asch(1946) 人物の特性をあらわす形容詞を順番を変えて読み上げてその人の好意度を評定させ⁴、印象形成の法則性（先情報が後情報を構造化）を発見

☆Asch の最も優れていた点は、研究を行った方法にある。架空の人物を使用することにより、

- ①実際の人物を使用した際の測定における複雑性を排除
- ②正誤を問題にすることなく、情報の構成と判断の関係の間に法則性を発見

I-ii-b. 新しい基準

Heider (1944) 他人の行動からの相手の理解＝物の動きや外見からの対象の理解 と議論

☆Heider の最も優れていた点は、研究を行う際に立てた目標と、そのために設けた基準にある⁵

行動を観察し、その人の特徴を理解する際の法則の記述が目的。法則に従えば“正しい”

I-ii-c. 新しいとりきめ

二人の研究は新しい方法論、理論を呈示、O P研究は新しい目標、方向性、運命を獲得

>>論理的アプローチは、推論の法則システムの理論的発展研究（→次章）と法則一致・不一致の行動の研究（→IV章）にわけられ、批判を受けつつも、現在のO P研究に影響を与え続けている

II. Heider の子どもたち：Ordinary Personology のロジック

I I-i. 素朴心理学

現在のO P研究は、Heider(1958)の考え方を理論的に拡張したり、実験的に検証したもの

II-i-a. Heider の考えの中心

①人間には、行動を決定する心理的特徴＝傾向性(disposition)があり、行動はその現われに過ぎない
更に行動がその人の傾向性を表すといっても、その関係の法則性は単純ではない

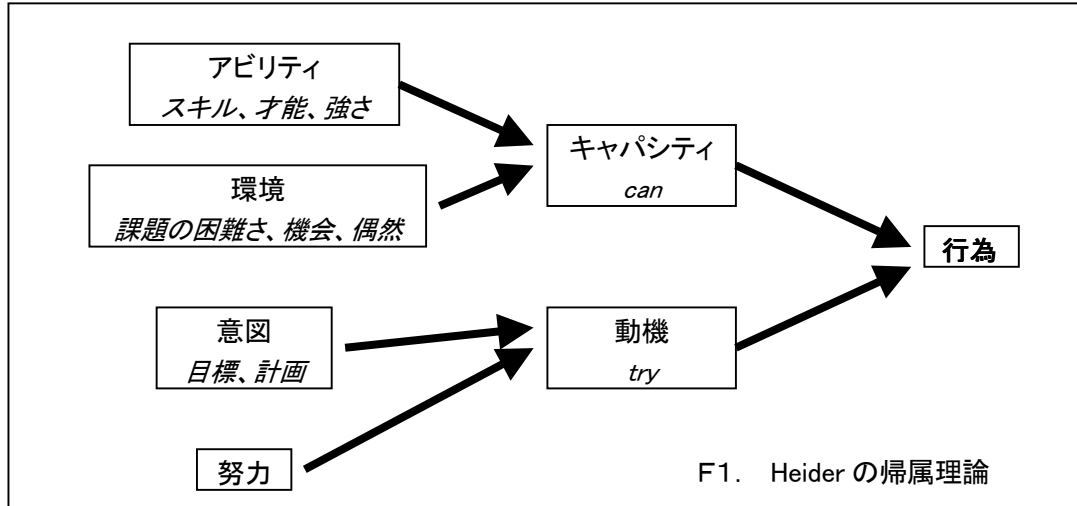
² 例えば、評定の数字があっているからといって、その数字に〇をつけた理由が違えば、正確とは言えない

³ 正確性研究は、エラー、バイアス研究に形を変えて、今日でも検討され続けている

⁴ “知性がある、勤勉、衝動的、批判的、頑固、嫉妬深い” vs. “嫉妬深い、頑固、批判的、衝動的、勤勉、知性がある”

⁵ Heider は実験を行わず、思考によって ordinary personology の法則を発見した

- ②人間は、帰属システムを通じ、変わる要素を多く含む行動から変わらない部分＝傾向性を抽出する
- ③帰属による傾向性の抽出は、リアリティの把握、予測、統制につながるので、非常に重要
- ④傾向性の抽出は、帰属システムの法則を使った精巧なものだが、当人にはその利用が意識できない
- ⑤帰属システムは行動を一時的原因と持続的原因の組み合わせの産物と考え、そこから傾向性を抽出



II-i-ii. 対応推論理論

Jones and Davis(1965)は意図に注目して Heider の理論を再定義し、実証研究につながる理論を構築

前提：対人知覚者の基本的課題は、ある行動の因果関係を解釈、推論すること

人は、他人が何をしようとしているのかをどのように推論するのか？

その情報によってその人たちについて何がわかるようになるのか？

II-ii-a. 意図の同定

各選択肢が他と違うところ（非共通効果）から、行為者の行動を導いた意図が同定できる

非共通効果が多い場合には、その特徴の社会的望ましさが考慮される

II-ii-b. 傾向性の推論

人は、行為の中でも、ある人を他から区別できるような不変の部分を抽出する

⇒対応推論(correspondent inference)

II-ii-c. Jones and Davis の考えの中心

①行為者の行動は、選ばれた選択肢と選ばれなかった選択肢の非共通な部分と共変し、そこからその人の意図が明らかになる

②非共通効果が複数あると、そこから考えられる意図も多いため、行為者の属性は特定できない

③他の人が選ぶであろう選択肢との共変を見ることで、その人の非凡な傾向性を明らかにできる

II-i-iii. 原因帰属理論

Kelly(1967, 1971a, 1971b)はOPの法則は原因帰属の特別なケースであると主張

II-iii-a. Kelly の考えの中心

Kelly の理論は Jones らの理論を因果関係から捉えなおして、持続性の問題も検討

- ①行動の弁別性、一貫性、合意性を調べて共変を探ることで、行為者の傾向性が分かる
傾向性推論のための3つの推論テスト
 - ①弁別性テスト：選択された選択肢とそれ以外との非共通効果の検討
 - ②合意性テスト：同じ属性をもつと考えられる他人との非共通効果の検討
 - ③一貫性テスト：行動が生じた状況と行為者の行動の共変の検討

- ②行為と各効果との共変が複数ある場合には、因果関係は特定できない
割引原理(discounting principle)：ある原因がある効果をうみだすときに果たす役割は、別にもっともらしい原因が他にある場合は割り引かれる

II-iii-b. 状況的な因果関係

Kelly(1972)は、状況的な原因の概念を刷新し、一般的な傾向性を状況要因として考えなおす。また、行動の原因を内的／外的にわけける。

II-iii-c. なじみのあるメタファー

Kelly のモデルは統合的で、そこに書かれているシンプルな原理で、様々な理論を再記述できる
Kelly のモデルは社会心理学者になじみのある言葉で、OPの仕組みを説明

III. Asch の子どもたち：Ordinary Personology のプロセス

Asch は OP のプロセスに注目し、個別の知識から、その合計以上の印象を形成する過程を示す
シンプルな実験的手法は継承され、知見が蓄積(e.g., Anderson & Jacobson, 1964; Hendrick & Constantitni, 1970; Hamilton & Zanna, 1974; Anderson, 1974)
明らかになったのは過程（現象が生じる際の間段階）ではなく、法則（演繹された諸現象の要約）

III-i. 社会的認知の伝統

1970年代、社会的認知研究の誕生

心理過程とその過程によって生み出された心的表象の記述を目的とする

内的妥当性、正確さ、統制を、新しく強力な技術を用いて追求

社会的認知は一般的な認知モデルの一部と考える(e.g., Wyer & Carlston, 1979; Wyer & Srull, 1986)

☆帰属、印象形成の際にはたらく論理的原理の記述からメンタルオペレーションの追求へ

III-ii. オペレーションの流れ

観察者が行為者に対する推論を行う際に生じるメンタルオペレーション：同定、帰属、統合

同定：観察者が行動を同定する過程

帰属：観察者が同定した行動から傾向性を推論する過程

統合：観察者が推論した複数の傾向性から印象を形成する過程

III-ii-a. 同定

ただ目にうつる行動(action)から、特定の意味をもった行為(act)を認識する過程を検討

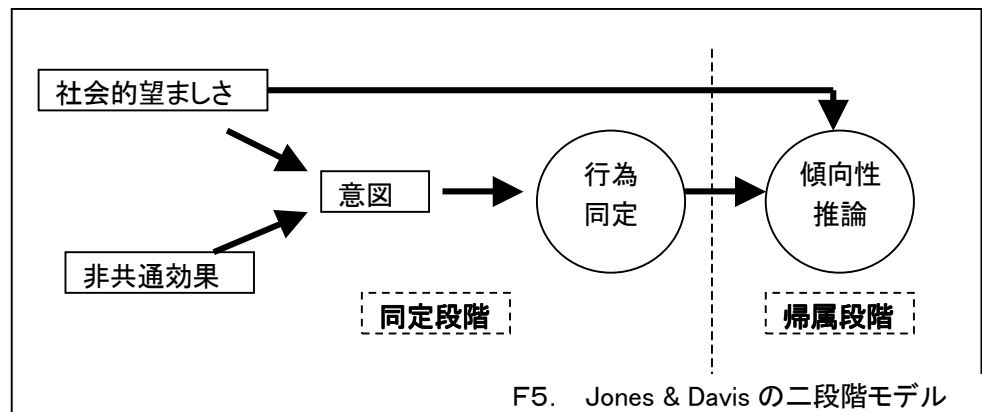
人は心的表象によって行動を意味あるものとして切り取る(Newston, 1973)

切り取った行動に特定の意味をあてはめる (例. 顔の筋肉を引き締める、笑う、ゴマをする)

この分野の研究は、どのような過程だとどの意味で行動が捉えられるかを検討

①観察者は行為を行行為者の意図から同定する

Jones and Davis (1965) は意図の概念を重視し、二段階モデルを構築



②行為者の意図は曖昧な場合が多いが、観察者は曖昧さを取り除こうとする

帰属研究者は推論の法則に注目、社会的認知研究者は無意識的で受動的なプロセスに注目

③観察者は行為者の行動を、それに対応する (or しない) 特性で同定する(e.g., Srull & Wyer, 1989)

III-ii-b. 帰属

①帰属過程は二つの下位過程（傾向性帰属/状況帰属）から成る

Quattrone(1982)は、係留と調整のメカニズム(Tversky & Kahneman, 1974)を使って帰属を説明
行為に対応する傾向性推論（係留）⇒状況の影響の考慮（調整）

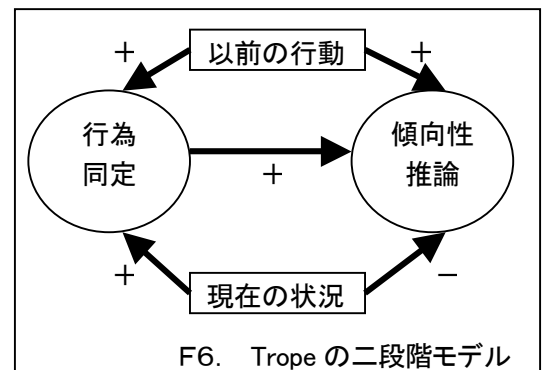
②同定過程と帰属過程は互いに影響しあっている

Trope(1986)は、行為者の以前の行動と現在の状況に関する
観察者の知識で、同定・帰属の両過程を説明
☆現在の状況に関する知識は両過程に逆方向の影響

III-ii-c. 統合

①特性から印象を形成させる手法 観察者が傾向性を統合して
印象形成。同定、帰属を経る

②行動から印象を形成させる手法 同定なし、最小限の帰属で統合段階を直接検討



☆統合過程は記憶内にある印象表象の研究と密接に関連(see Smith, 1998; Wegener & Bargh, 1998)

特徴①印象は整合性を保つ

暗黙の性格理論(Schneider, 1973; Wishner, 1960)を用いて、行為から推論した傾向性以外の傾向性も予測

特徴②印象は機能的に構造化されている

暗黙の性格理論がどう使われるか=印象形成過程はそれを行う観察者の目的に応じて異なる

特徴③印象は(行動とは独立して、) 自立的に機能する

印象の元になった行動がゆがんでいると分かった場合でさえ、一度形成された印象が保持される
(Anderson, Leper, & Ross, 1980; Ross, Leper & Hubbard, 1975)

III-iii. オペレーションの特徴

無意識的な過程の重要性は自覚されていたが、心理学者はそれから眼を背けていた

フロイト時代：抽象的で自分の意志を持つ、人間を操るお化けのようなもの

20世紀初期の行動主義：無意識の存在を否定し、すべてを行動・意識的過程で説明

20世紀半ば：フロイトとは異なるスタンスで無意識の情報処理過程の存在を主張

①無自覚的②非意図的③努力は不要④統制不可能(Helmholtz, 1910/1925)

⇒自動的過程として継承(Bargh, 1989; see also Hasher & Zacks, 1979; Posner & Snyder, 1975; Schneider & Shiffrin, 1977; Wegener & Bargh, 1998)

☆同一視されていた傾向性の推論と意識的な因果論法(Hamilton, 1988; Hilton, Smith, & Kim, 1995; Langer, 1978; Zuckerman, 1989)が自動性で区別される

III-iii-a. 自発性と自覚

他者の行為を見るとその人の特徴を自発的に推論する(e.g., Pryor & Kriss, 1977; Smith & Miller, 1979, 1983; Winter & Uleman, 1984)

この知見には疑問も提出されているが、OP研究への理論的な貢献もあり

疑問①本当に自発的なのか？

⇒語を理解しようとする最低限の欲求は必要だが、対象を理解しようとする顕現的欲求は不要(see Bassili & Smith, 1986; Uleman & Moskowitz, 1994; Whitney, Waring, Xzingmark, 1992)

疑問②本当に特性を推論しているのか？

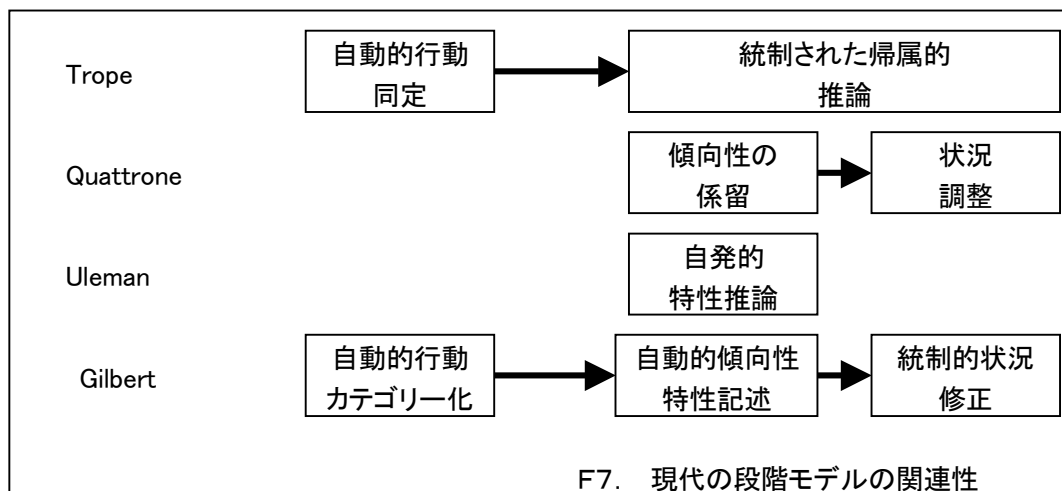
⇒単なる行動の要約ではないが、Heider たちが考えていた傾向性推論とも異なる(e.g., Carlston, Skowronski, 1994; Carlston, Skowronski & Sparks, 1995; Newman & Uleman, 1993; Uleman et al., 1993; Whitney, Davis & Waring, 1994)

貢献①傾向性推論というフレーズが何を意味するのかについて、まともに議論できるようになる

貢献②傾向性推論が必ずしも熟慮の結果ではないことを示唆。Reflection よりも reflex(反射的)

III-iii-b. 容易さ

Gilbert, Pelham, & Krull(1988)は 1980 年代末までの知見を整理、3 段階モデルを提出
カテゴリー化と特性記述は容易な自動的過程で、その後修正＝意識的過程で論理法則に従った帰属



F7. 現代の段階モデルの関連性

III-iii-c. 必然性

Krull(1993)知りたいものが何であるか (状況／行為者) によっては傾向性推論は不可避ではない

III-iv. 文脈の問題

帰属研究も社会的認知研究も、どんな行動に対しても同じ過程、法則がはたらくとみなす
→次第にそうではないと指摘

III-iv-a. 領域特定性

帰属は文脈の影響を受けることが指摘された(e.g., Weiner et al., 1971; Reeder & Brewer, 1979)
当時は一般的な理論に例外はつき物で、その場合だけ領域特定の帰属理論が適用されると説明
⇒しかし、いつ一般的法則が使われ、いつ例外的法則が使われるかはわからない

III-iv-b. tacit の表象

人間が法則を知り、それに従うとはどういうことか？

法則は implicit, explicit そして tacit のうちのどれかの方法で表象されうる(Denett, 1987)

Explicit : 法則はシステムの決まった箇所に物理的に貯蔵されたものとして実際に存在

Implicit : explicit に貯蔵されたものの中に論理的に示唆

Tacit: 経験をつむと、論理自体を理解していなくても、それに従った行動が取れる

法則が explicit に表象されている場合には、人は法則を知ったり使ったりすることができる。

しかし、法則が tacit に表象されている場合には、人は法則にただ従うだけ

III-v. 次なる伝統

社会的認知研究は、社会心理学のどの分野にも影響を及ぼしたが、最近の不備も指摘されている少なくとも以下の3つの障壁を破る必要

III-v-a. 手法

特性形容詞を読ませるという手法は、形容詞が意味するものと一対一対応しない(Zajonc, 1980a) 実際に人を見て印象形成する過程とはずいぶん違っている(Barr et al., 1991; Pearson et al., 1984; Rayner & Pollastek, 1989; see also McArthur & Baron, 1983)

III-v-b. モデル

認知心理学は“陳腐な箱と矢印の絵(Fodor, 1983)”を捨てて、認知神経科学へと転換。社会心理学は？
①そのまま箱と矢印を調べ続ける→認知心理学が直面した限界と同じものを経験する危険
②認知心理学に追随して脳の中を検証する→社会心理学消滅の恐れ。すべての研究が同一化
③より伝統的な水準を見直す→一見負けを認めるような感じだが、立派な戦略で慎重な動き

III-v-c. 併合

すべてのOPを統一するような単一の言語や技術の基準が存在しない
ステレオタイプ化、印象形成、人物記憶などの各分野は独自の伝統をもっており、統一は困難
各過程の相互の影響の仕方を調べることで、各過程の違いは些細であることがわかるかもしれない